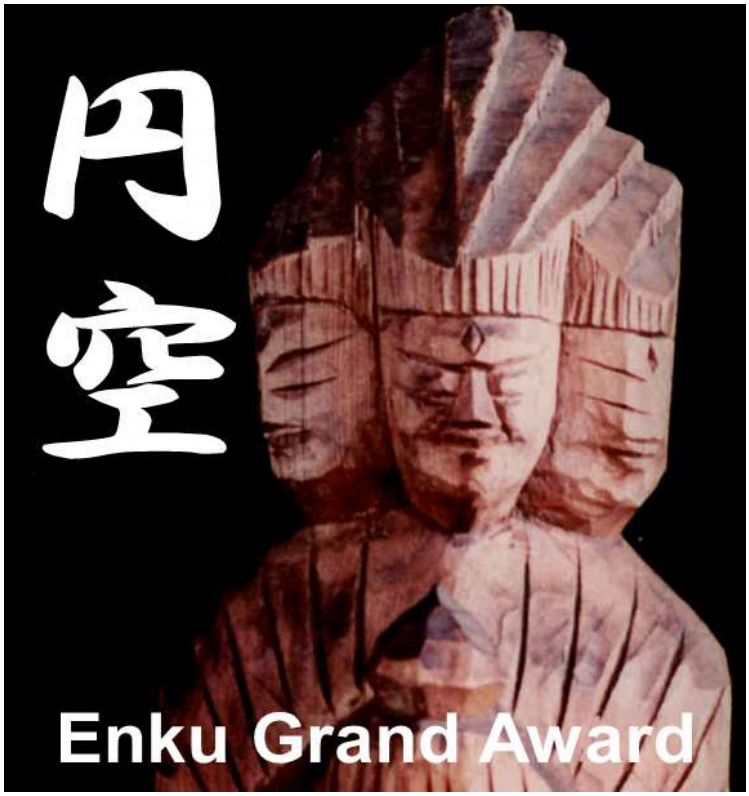
第10回 円空大賞

受賞者の選評および
作家略歴・作品写真



第10回　円空大賞の総評と受賞者

第10回 円空大賞の総評

生涯10万体の制作を目指し、岐阜を本拠に近畿から東日本にかけて、独特な鉈彫彫刻を残した修験僧円空の業績は、岐阜県民の誇りであり、これを日本のみならず、広く海外にも広めるべきと考え、円空大賞の設立を発案され、梅原猛氏を初代委員長として平成11年（1999）第1回の選考委員会が行われた。以後、隔年に行われた円空大賞展は、今回で10回を迎える。節目に当たる今年、梅原氏が逝去されたことは、痛恨の極みであり、委員一同、深く哀悼の意を表したい。

創設以来20年を経て、回を重ねるごとにその独自の存在が国内外で注目されるようになってきた。今回も選考委員による熱心な討議の末、円空大賞としてTARA財団（Tara Ocean Foundation）が選ばれた。2003年に設立されたこの財団は、科学探検スクーナー船TARA号が地球を巡航して、海洋環境の保護のために調査・研究を行う。科学者だけでなく、アーティストもそれに同乗して、体験をもとに制作するというもの。プロジェクトそのものを受賞の対象とする前例のない選定だが、東北・北海道を単独で旅し、制作し続けた円空の生き方に通じることが認められた。

選考委員長　辻　惟雄（東京大学名誉教授、多摩美術大学名誉教授）

受賞者

円空大賞　TARA財団（非営利団体）…… 2

円　空　賞　安藤　榮作（彫刻家）…… 4
池田　学（画家）…… 6
大嶽　有一（彫刻家）…… 8
羽田　澄子（記録映画作家）……10

第10回　円空大賞

TARA財団（非営利団体）

Tara Ocean Foundation

Explore to understand
Share for a change

フランス：パリ

2003年設立

選評

日比野　克彦
（岐阜県美術館長）

世界の海を舞台にアーティストを乗せて、海洋環境問題を専門の科学者とともに調査する海洋科学探査船TARA号は、TARA財団が企画運営するプロジェクトである。科学者が調べて解明して発信できることとは別に、アーティストでないと感じることができない海の状態、様子、そしてそれを作品にして伝えていくことにより、アートにしかできない社会的な課題に対する問いかけが生まれてくる。芸術と科学の融合、個人でなくプロジェクトとしての集団での活動など、これまでの円空大賞にはなかった類のTARAの活動は、私たちの社会における新たなアートの役割を、21世紀の社会に必要なアートの使命を提示してくれている。TARA号はこれまでに2回、日本に寄港している。瀬戸内海にはTARAの活動を常時紹介し、海洋環境問題を考えるワークショップを行う拠点も開設される予定である。今後、ますます日本国内においても活躍が期待されるTARAの活動を私も大いに期待したい。

経歴

2003　アニエスベーのCEOエティエンヌ・ブルゴワが環境の脆弱性について啓発するためにタラ海洋探査プロジェクトを発足

2004（6～9月）
北極生態学研究グループ（GREA）の研究者がタラ号に乗船しグリーンランド北東部の状況調査

2004～2006
グリーンランド・南極・パタゴニア・南ジョージアで6回の探査

2004（11月）
「モンターニュ・デュ・シランス（沈黙の山）」グループとともに南ジョージア探査。聴覚障害者と健常者両方が参加する登山家グループが、探検家アーネスト・シャクルトンの足跡を追う旅に出航

2005　アーティストのセバスチャン・サルガドおよびピエール・ユイグがTARA号に乗船し南極探査。ブラジリアの写真家サルガドが自身のプロジェクト『ジェネシス』遂行のために乗船、フランス人アーティストのユイグは映画『A Journey That Wasn't』撮影のために乗船

2006～2008
「TARA号 北極プロジェクト」欧州の研究プログラムDAMOCLESの一環として、507日間にわたり北極海2,600kmを航行

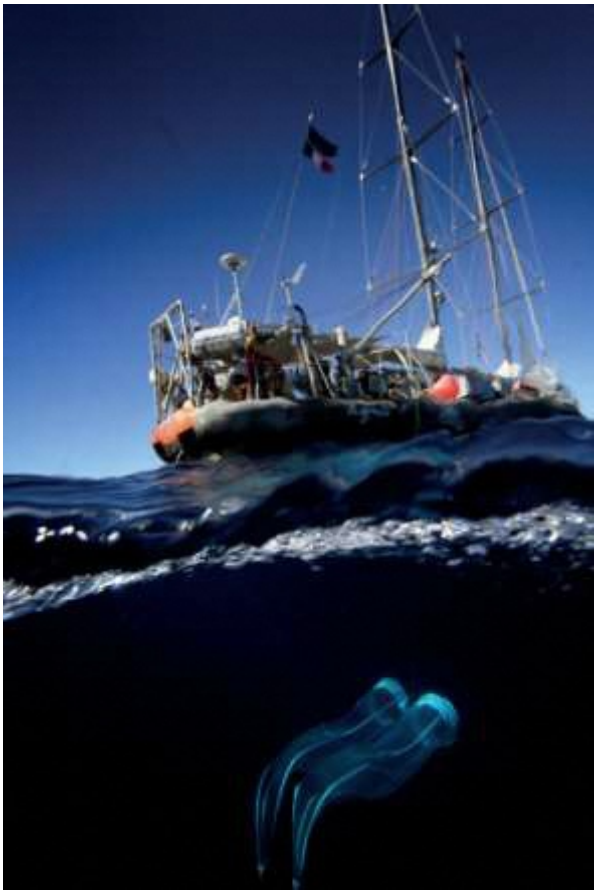
2009～2013
「TARA号 海洋プロジェクト」「TARA号 北極圏プロジェクト」プランクトン生態系とその気候変動への脆弱性について調査するために、30ヶ月におよぶ科学探査を実施。科学・教育上の目的で北極海近辺を航行

2014（5～11月）
「TARA号 地中海探検プロジェクト」地中海におけるプラスチック汚染調査、現地の環境問題に関する意識向上のための科学調査を実施

2015　科学雑誌「サイエンス」にTARA号海洋プロジェクトによる最初の主要な成果が掲載

2016～2018
「TARA号 太平洋プロジェクト」アジア太平洋地域にてサンゴ礁の調査

TARA ARCTIC　Journey to the heart of climate change（2006 - 2008）
©François Bernard / Fondation Tara



TARA OCEANS　Marine life seen through a microscope
（2009 - 2013）

第10回　円空賞

安藤（あんどう）　榮作（えいさく）（彫刻家）

Eisaku Ando

日本：東京都出身（奈良県在住）
1961年生まれ

選評

高橋　秀治
（岐阜県現代陶芸美術館長）

東京藝術大学で彫刻を学んだ安藤榮作は、西欧的で合理的な方法ではなく、手斧一本で原木を刻み付けるという制作方法をとってきた。作品の表面は細かな凹凸の集積となり独特の質感と表情を獲得し、土俗的な印象を与える。そうした制作方法は今も一貫しているが、東日本大震災による津波と火災のために福島県にあった自宅と多くの作品を失い、さらに原発事故のため福島を離れ、以前にも増して人の存在と作品制作を結びつけるようになった。人の力では制御不能な災害が、人が制御できると思っていた原子力の本来の姿をあらわにしたことを目の当たりにし、人の存在が自然と対立するものではなく、自然の一部、宇宙のほんの小さな一部であることをより強く意識するようになった。人が生きるということは人自体の中にあるミクロコスモスと宇宙（コスモス）の摂理と矛盾なくシンプルに同期するということ、作家自身のそうした感覚、生きる瞬間の感覚を刻み付けた作品は深く我々に語りかけてくる。

経歴

1961　東京都墨田区に生まれる
1986　東京藝術大学 美術学部彫刻科 卒業
1990　福島県いわき市に移住
1992　個展「NEW ART SCENE IN IWAKI・EISAKU ANDO」（いわき市立美術館／福島）
1996　福島の新世代’96（福島県立美術館）
1997　第5回 国際コンテンポラリーアートフェスティバル（東京ビックサイト）
　　いわき地域学会美術賞 受賞、安藤榮作彫刻展（ギャラリーいわき／福島）
　　以後隔年開催
2001　ヴァイブレーション・結び合う知覚（宇都宮美術館）
2003　N.E.blood21 vol.6 EISAKU ANDO（リアスアーク美術館／宮城）
2005　アジアの潜在力・海と島が育んだ美術（愛知県立美術館）
2007　個展「Breeze of Soul・EISAKU ANDO」（東京国際フォーラム）
2008　丸木スマ展・世代を超えて共演（埼玉県立近代美術館）
2009　大地の芸術祭・越後妻有アートトリエンナーレ（新潟）
　　個展「天の果実・安藤榮作展」（ギャルリー志門／東京）以後隔年開催
2011　東日本大震災の津波にて被災。福島原発事故を機に奈良県に避難移住
　　いま。つくりたいもの。伝えたいこと（いわき市立美術館／福島）
2013　2013・三義国際木彫芸術祭（苗栗県三義郷／台湾）
　　個展「光のさなぎたち」（丸木美術館／埼玉）
2014　祭、炎上、沈黙、そして… POST 3.11（東京都美術館）
2015　水と土の芸術祭（新潟）、学園前アートウィーク2015（奈良）
2016　個展「TO SOUL FROM SOUL・安藤栄作展」（MU 東心斎橋画廊／大阪）
　　いま、被災地から・岩手・宮城・福島の美術と震災復興（東京藝術大学大学美術館）
　　つくることは生きること・震災–明日の神話–展（川崎市岡本太郎美術館／神奈川）
2017　第28回平櫛田中賞 受賞、第28回平櫛田中賞受賞記念 安藤榮作展 SOUL LIFE SPIRIT（井原市立田中美術館／岡山）
　　安藤榮作展 REY 光の河・光の滝（センサート ギャラリー／三重）
2019　もやい展（金沢21世紀美術館）、
　　POST3.11沈みゆく記憶の淵で（本郷新記念札幌彫刻美術館）

第10回　円空賞

安藤　榮作

鳳凰（2016）
ヒノキ・サクラ・カキ 420cm×380cm×50cm（作家蔵）

約束の船（2016）
230cmのヒノキのカヌーと1500体の木彫人型によるインスタレーション
（作家蔵）

狛ちゃん（2018）
160cm～70cmのクス材とヒノキ材の様々な「狛犬」や「狛うさぎ」約20点による展示
（個人蔵及び作家蔵）

第10回　円空賞

池田（いけだ）　学（なまぶ）（画家）

Manabu Ikeda

日本：佐賀県出身（アメリカ在住）
1973年生まれ

選評

パトリシア・フィスター
（国際日本文化研究センター教授）

池田学は並外れた創造力にあふれ、膨大な時間をかけ自然・歴史・技術の進歩、そして自然災害に至るまでを題材にしている。カラフルで複雑な作品は、まるでおとぎ話の世界のようである。最先端技術の利点を理解しつつ、自然環境への悪影響も非常に危惧し、伝統と現代の狭間でもがき、自然災害も重要なテーマになる。幼少期より緻密な絵を鉛筆で観察・想像したものを描き、心に浮かぶイメージを展開する。小さな筆致の蓄積を小さな細いペンで形成するために、壁全体のような大作を10cm単位で一年以上をかけている。制作を通して何かを成長させ、イメージを作り出す。ミクロとマクロの両方を同時に持つ独特の世界観と超絶技巧に対して国内外で高い評価を受け、見るものに広い世界と宇宙において自分たちがいかに小さな存在かを知らしめる。人と自然の変化の中でバランスを探ることは難しいが、信じられないほど想像力豊かな絵の中で最も鮮やかに表すことができており、それは彼の持つ偉大な自然の力といえる。

経歴

1973　佐賀県多久市に生まれる
2000　東京藝術大学大学院 美術研究科デザイン専攻 修了
2001　個展（銀座スルガ台画廊／東京）
2006　個展「景色」（ミヅマ・アクション／東京）、ALLLOOKSAME?/TUTTTUGUALE?−日本・中国・韓国からのアート（サンドレッド・レ・レバウデンゴ財団／イタリア）
2007　Thermocline of Art − New Asian Waves（カールス・ルーエ・アート・アンド・メディア・センター／ドイツ）
2008　Great New Wave: Contemporary Art from Japan（ハミルトン アートギャラリー、ビクトリア美術館／カナダ）（〜2010）
ネオテニー・ジャパン−高橋コレクション（霧島アートの森、札幌芸術の森美術館、上野の森美術館、新潟県立近代美術館、秋田県立近代美術館、米子市美術館、愛媛県美術館を巡回）（〜2009）
2009　個展（おぶせミュージアム・中島千波館／長野）
2010　個展「焦点」（ミヅマアートギャラリー／東京）
2011　文化庁芸術家在外研修員としてカナダ・バンクーバーに滞在
バイバイキティ!!! 天国と地獄の狭間で−日本現代アートの今−（ジャパン・ソサエティギャラリー／ニューヨーク）
ヨコハマトリエンナーレ2011（横浜美術館）、第4回モスクワビエンナーレ（アートプレイデザインセンターほか、モスクワ、ロシア）
2013　DOMANI・明日展（国立新美術館／東京）
池田学 & 天明屋尚（チャゼン美術館／ウィスコンシン、アメリカ）
2014　異形の楽園：池田学・天明屋尚 & チームラボ（ジャパン・ソサエティー・ギャラリー／ニューヨーク）、第25回タカシマヤ文化基金 美術賞 受賞
2015　COSMOS / INTIME - Collection Takahashi〜内なる宇宙−高橋コレクション展（パリ日本文化会館／フランス）
2017　池田学展 The Pen −凝縮の宇宙−（佐賀県立美術館、金沢21世紀美術館、日本橋髙島屋を巡回）
2018　三人展 −Forward Stroke 明日への眼差し−（佐賀県立美術館）
カタストロフと美術のちから展（森美術館／東京）

第10回　円空賞

池田　学

誕生（2013-2016）
紙にペン、インク、透明水彩　300×400cm／佐賀県立美術館蔵
デジタルアーカイブ：凸版印刷株式会社
©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery Tokyo/Singapore

興亡史（2006）
紙にペン、インク　200×200cm／高橋コレクション
撮影：宮島径
©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery

存在（2004）
紙にペン、インク　145×205cm／Collection of JOAN AND MICHAEL SALKE
©IKEDA Manabu, Courtesy Mizuma Art Gallery

第10回　円空賞

大嶽（おおたけ）　有一（ゆういち）（彫刻家）

Yuichi Otake

日本：岐阜県出身

1949年生まれ

選評

高橋　秀治
（岐阜県現代陶芸美術館長）

大嶽有一は、名古屋造形芸術短期大学を卒業後、ジュネーブ州立美術学校で彫刻と版画を学んだ。人物像などを手がけたのち、鉄を素材とした抽象的な彫刻へと向かった。彼は主に鉄の板を用いて、均整のとれたシンプルなフォルムを追求してきた。彼の作品は饒舌ではない。その抽象形態からは寡黙で静謐な印象を受けるだろう。何かを声高に見せようとするのではなく、静かに祈りを続けているようにも見える。シンプルで心地よい形とともに重要な要素として作品の表面に浮かぶ錆の痕跡が深みを与えている。鉄を溶接して形作られた作品は一旦、戸外に置かれ自然に腐食する長い時を経る。そして表面の赤錆を取り除いて独特のテクスチャーを獲得する。さらに再び錆びないように表面処理がなされる。物が酸化していく自然の摂理とその時間が封じ込められた作品ともいえる。自然との共同作業といっても良いかもしれないが、根底にあるのは常に存在感のある作品を生み出そうとする作家の静かで強い意志の表れである。

経歴

1949　岐阜県多治見市に生まれる
1970　名古屋造形芸術短期大学 彫塑科 卒業、初個展(桜画廊／名古屋)以後'71'72
1972　渡欧。スイス ジュネーブ州立美術学校　入学（～'78卒業）
1975　リュブリアナ国際版画ビエンナーレ展（旧ユーゴスラビア）'77'79
　　個展（ギャルリデフィロゾフ／ジュネーブ）
1976　第5回 ブリティッシュ国際版画ビエンナーレ展（イギリス）
　　ibaインターナショナルブックアート figura-2版画展（ドイツ）
　　第2回 スイスビエンナーレ Image Multiprier展（ジュネーブ）
　　ヨーロッパミニアチュール版画展（ドイツ）
1977　Setsuko NAGASAWA et Yuichi OTAKE（アテネ美術館クロニエルホール／ジュネーブ）
1978　クラコヴィ国際版画ビエンナーレ展（ポーランド）'80
　　第1回 スイス デッサン クワドリエンナーレ 新しい世代展 Hilly賞 受賞（ラッツ美術館／ジュネーブ）、個展（ギャルリプレクチュス／スイス）
1985　岐阜現況展「戦後生まれの作家たち」立体部門（岐阜県美術館）
1986　岐阜現況展「戦後生まれの作家たち」平面部門（岐阜県美術館）
　　ドイツと日本の作家たち 今日の金属造型展（石川県立美術館、札幌彫刻美術館、山形美術館、神奈川県立美術館）
1987　岐阜県芸術文化活動等 特別奨励賞 受賞
1989　個展（ギャラリーキャプション／岐阜）'91'94
1992　個展（INAXギャラリー／東京）
1993　NCAFコンテンポラリーアートフェア（桜画廊／名古屋）
　　個展（新桜画廊／名古屋）
1999　景をめぐる五感のかたち展（名古屋市民ギャラリー）
　　個展（ギャルリユマニテ／名古屋）
2002　個展（MHSタナカギャラリー／名古屋）'08、個展（ギャルリももぐさ／岐阜）
2005　素材への思い-力と可能性-展（美濃加茂市民ミュージアム／岐阜）
2012　大嶽有一展（美濃加茂市民ミュージアム／岐阜）
2016　個展「Metalwork Masters OTAKE YUICHI」（Mingei Japanese Arts／パリ）

第10回　円空賞

大嶽　有一

Spore-Ⅱ（1992）
鉄　143.0×21.5×7.7cm／作家蔵
撮影：小寺　克彦

Kaï-Ⅲ（2012）
鉄　80.0×160.0×24.0cm／作家蔵
撮影：小寺　克彦

『の』-Ⅶ（2018）
鉄　25.0×24.0×13.0cm／個人蔵
撮影：森川　諒一

第10回　円空賞

羽田（はねだ）　澄子（すみこ）（記録映画作家）

Sumiko Haneda

旧満州：大連市出身（東京都在住）
1926年生まれ

選評

辻　惟雄
（東京大学名誉教授、
多摩美術大学名誉教授）

羽田澄子は、日本の記録映画史に残る監督である。夫の工藤充氏をプロデューサーとして制作された作品には、名役者の舞台と家庭生活のすべてをたどった『歌舞伎役者片岡仁左衛門・昇仙の巻』、住民と行政とが力を合わせて福祉の問題に取り組むさまを記録した『－続・住民が選択した町の福祉－問題はこれからです』、老人問題をいち早く取り上げた『終わりよければすべてよし』『痴呆老人の世界』、絵巻『山中常盤』など、幅広い対象を記録するだけでなく、監督自身の人生観をも滲ませており、映像の美しさも特筆される。初の自主作品『薄墨の桜』は、岐阜県の根尾谷に残る樹齢1500年あまりの古木の、四季の移ろいに伴う様々な表情を、それを守る住民の暮らしとともにとらえたもので、監督の死生観がそこに重ね合わせられている。「考えてみれば、私は岐阜といろいろ縁がある」と監督はおっしゃった。このほかにどんな縁があるか、できればうかがってみたい。

経歴

1926　旧満州大連市に生まれる
1950　岩波映画製作所の創立とともに入社。岩波写真文庫の編集を経て記録映画の演出に携わる
1957　『村の婦人学級』（製作：岩波映画／企画：文部省）が初監督作品
1977　初の自主作品『薄墨の桜』を発表
1982　『早池峰の賦』（自由工房）文化庁芸術選奨文部大臣賞、エイボン芸術賞 受賞
1985　『AKIKO-あるダンサーの肖像-』（自由工房／アキコ・カンダ事務所）第1回文化庁芸術作品賞（長篇映画の部）受賞
1986　『痴呆性老人の世界』（岩波映画）毎日映画コンクール教育文化映画賞、キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位、日本映画ペンクラブ賞ノン・シアトリカル部門第1位 受賞
1990　『安心して老いるために』（自由工房）山路ふみ子福祉賞、文化庁優秀映画作品賞 受賞
1992　『歌舞伎役者 片岡仁左衛門』全6巻（自由工房）キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位、第1回スポニチ文化芸術大賞グランプリ、日本映画ペンクラブ賞ノン・シアトリカル部門第1位
1999　『－続・住民が選択した町の福祉－問題はこれからです』（自由工房）キネマ旬報文化映画ベスト・テン第1位、毎日映画コンクール記録文化映画賞受賞 受賞
2001　『-元始、女性は太陽であった- 平塚らいてうの生涯』（自由工房／平塚らいてうの記録映画を作る会）日本映画ペンクラブ賞ノン・シアトリカル部門第1位
2008　『嗚呼 満蒙開拓団』（自由工房）キネマ旬報ベスト・テン第1位 文化庁文化記録映画大賞、日本映画ペンクラブ賞ノン・シアトリカル部門 第1位 受賞、全国映連賞＜監督賞＞受賞
2010　第33回日本アカデミー賞協会特別賞、第38回日本映画ペンクラブ賞 受賞
2012　『そしてAKIKOは… あるダンサーの肖像』（自由工房）
2018　ジャポニスム2018公式企画で『歌舞伎役者 片岡仁左衛門』全6巻が特別上映（パリ日本文化会館）

第10回　円空賞

羽田　澄子

嗚呼 満蒙開拓団（2008）
120分　DVCAM／自由工房作品／演出：羽田澄子

早池峰の賦（1982）
186分 16mm カラー／自由工房作品／演出：羽田澄子
撮影地：岩手県大迫町

薄墨の桜（1977）
42分 16mm カラー／脚本・演出：羽田澄子
撮影地：岐阜県根尾村